

# 天のかぐ山

武 田 祐 吉

わたしは、かつて、天のかぐ山に就いて書いた一文をある雑誌に寄せたことがある。その文の主旨は、山の名をいふことは山靈を呼ぶ心であるといふことであつた。天のかぐ山の名において、それを述べたのは、その山が、万葉集の歌詞によつて、親まれてゐるからであつた。

いにしへの事は知らぬをわれ見ても久しくなりぬ、天のかぐ山

少年の頃から、その山を見て過して来た。生まれない前の事は知らないのだがといふ言ひ方には、古い時代に何かあつたさうだといふ事を、ほのぼのと感じてゐるところがある。十分には知らないが、その山の歴史を、かつては聞き伝へてゐるのだらう。この歌の作者が言つたいにしへの事とは、何を意味するのであるか、今日では、残つてゐる文献を材料として考へるほかは無い。それは古代人の生活に触れるものであつたらうが、今日では神話の形で取り扱はれることになつてゐる。

中大兄の三山の御歌に、かぐ山は畝火ををしと耳梨とあひ争ひきといふのは、かぐ山が、他の山と妻争ひをしたことを伝えるもので、神話としては人間くさい。人間世界にあり余る事件を取りあげることによつて、血の通つてゐる山靈を感じさせる。これに比べると、古事記や日本書紀に出てくる、かぐ山は、神様づきあひであつて、神祕、神聖の度が強くなつてゐる。岩戸びらきの神話では、岩屋にお隠れになつた天照らす大神を、いかにしてふたたびお招き申すべきかを計るために、まづ天のかぐ山の天のまを鹿の肩をそつくり抜いて、同じ山の天のハハカの木でこれを焼いて占ひをした。さうして次に、天のかぐ山の、枝の茂つてゐるまさか木を根こじにこいで来て、上の枝に玉を掛け、中の枝に鏡を掛け、下の枝に麻や楮を掛けて、そのもとで祝詞をとなへた。

万葉の歌の、いにしへの事の内容には、大体上記のやうな事が含まれるのだらうが、万葉の歌人たちは、このやうな神話伝説を背景として、現前にこの山を眺めてゐるのである。藤原の宮は、この山に接近して建設されたので、その時代の歌に、この山の名が呼ばれることも多いのである。藤原の宮を始められた持統天皇の御製に、

春過ぎて夏来たるらし、しろたへの衣ほしたり、天のかぐ山

とあるのは、この山を客観的に詠まれて居り、あかるい気分之歌となつてゐる。

鴨君足人は、藤原の京附近を本居としてゐた人であるが、奈良に都が遷されて、藤原が旧都となつたのを傷んで詠んだ歌を伝へてゐる。その歌はかぐ山を中心として詠んでゐる長歌であるが、その冒頭の句は、天降りつく天のかぐ山と置いてゐる。

かぐ山が天から降つて来たといふふうに取りれるが、この歌の別伝には、天降りつく神のかぐ山とある。この歌について、仙覚の万葉集註釈には、まづ、あもりつく天のかぐ山とつづけたのは、そらの香のかをり来れば、あもりつくとも詠めると心得べしといひ、また阿波の国の風土記に、空から降りて来た山の大きいのは阿波の国に降り、これをあまのもと山といひ、その山が摧けて大和の国に降つたのを、あまのかぐ山といふとあるのを引いてゐる。これは阿波の国の人々が、自分の国の山をほめ、他国の山をくさした言ひ分である。大和の国では、もちろんこの山を神聖な山とし、天から降つたとする伝へもあつたのだらう。

かぐ山の文字表示は、万葉集に、高山、香山、香山、香具山、香来山、芳山、芳来山とある。また古事記日本書紀に、香山とあり古事記の歌詞に迦具夜麻、日本書紀の訓釈に、香山を介遇夜摩といふとある。これらによつて、カグヤマ、もしくはカクヤマといふことが知られる。以上のうち、高は、字音によるものなるべく、香もカグの音の字であるが、訓もカグであり、芳も訓を使用したものであらう。高、香、芳は、この山にふさはしい好字を用ゐたものであらうが、山名の語義を伝へるものとも考へられなう。

同一の地名としては、播磨の国の風土記、揖保の郡に、香山の里があり、もと鹿来の墓と言つたとある。鹿来の墓と名づけたわけは、伊和の大神が国を占めた時に、鹿が来て、山の峯に立つた。山の峯も墓に似てゐたからいふとある。

鹿は、古代には多数棲息したものであつて、その捧げたる角は、しもと原のやうであつたといひ、鹿によつて地名をなしてゐるものも少からずある。播磨の賀古のみなともその一つである。カコといふのは、その愛称であるが、またカクとも言つた。古事記に、天の鹿兒弓とも天の真鹿兒矢ともいふは、鹿の靈力の宿つてゐる弓矢で、また麻加古弓、加久矢とも書いてゐる。

天孫降臨の神話に、天の安の川の水を逆しまに塞ぎあげて道をふさいでゐる天の尾羽張の神を召すために、特使を出すのに、外の神ではいけなうといふので、選び出された天の迦久の神といふのは、鹿である。この尾羽張の神といふのは、かつていざなぎの命が、火の神かぐつちの頸を斬つた劍である。その火の神が生まれたために母神のいざなぎの命の病み臥した時に成つ

た、はにやす彦と、はにやす姫の名は、かぐ山のほとりに地名として残り、かくていぎなみの命のお隠れになつたのを悲んで泣いたいぎなみの命の涙によつて、かぐ山のふもととの木の下に居られる泣沢女の神は出現したといふ。かぐ山に縁故のふかい神話である。

古代人は、鹿を神聖なものとした。それ故に鹿の肩骨を抜いて大切な占ひに使ふのである。

古事記中巻、仲哀天皇の條に、天皇が大中津比売の命を召して生みませる御子に、香坂の王と忍熊の王とがある。このお二方は、後に神功皇后の筑紫からの還御に際して一條の説話のある方であるが、その名は、日本書紀には、麿坂の皇子、忍熊の皇子と書いてある。麿は鹿の子の義の字で、倭名類聚鈔、毛群部、鹿の條に、「其子曰麿、音迷、字亦作麿、加吳」とある。これによつて、香坂は、カゴサカと読むべく、これはオシクマ（大きい熊）と對する語で、鹿の子を意味する名であることが知られる。しかもそれが、古事記では香の字で表記されてゐるのである。

延喜式に伝はつてゐる祈年祭の祝詞は、大和の国の中央部に宮廷のあつた時代の作とされてゐるが、その中の山の口の祭の詞に、

飛鳥、石村、忍坂、長谷、畝火、耳梨と御名は申して、遠山近山に生ひ立てる大木小木を、本末打ち切りて持ち参る来て、皇御孫の命の瑞の御舍仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隠りまして、四方の国を安国と平けく知ろしめすが故に……

とある。これは宮殿の用材を産出する山々の神の祭であつて、こゝに挙げられてゐる飛鳥以下の名は、宮廷の所在地を囲む隣近の山名である。しかもその中に、畝火、耳梨が入つてゐながら、かぐ山が入つてゐないのは、何故であらうか。その山に用材となるべき樹木が無かつたとは考へられないから、これはその山を神聖な山として樹木を伐ることを憚つたためと見るべきである。

延喜式の神名帳、左京二條に坐す神社として、太詔戸の命の神、久慈真智の命の神の二座を挙げてゐるが、その久慈真智の命の神の條、九條家本に、本社は大和の国の十市の郡の天の香山に坐す櫛真の命の神といふ書き入れがあり、これは、大和の国の十市の郡の條にある。天の香山に坐す櫛真の命の神の社とあるをさすものである。この太詔戸の命、久慈真智の命は、卜占の神で、占ひをする時に祭られる神である。クシマチは、靈奇なる町形の義で、マチは、占ひの現れるところをいひ、これは鹿の肩骨に画かれた区劃をいふのである。

火明の命の系統については、諸伝があるが、日本書紀の本文を挙げれば、鹿葦津姫が戸の無い室に入り、これに火を放つて

子を生む時に、はじめ起る煙の末から成りいでた子の名を火闕降（ほすりり）の命といひ、次に熱を避けて居る時に成りいでた子の名を彦火々出見の命といひ、次に成りいでた子の名を火明の命といふとある。これは火のあかるさを名にした神名であるが、その神の子に天の香語山（かご）の命があり、これは尾張氏の祖先である。

鹿に関する神話伝説はたくさんある。春日神社で、鹿を神鹿といふは、これを神のお乗りものとするのであるが、一方ではまた荒ふる山の神が白い鹿になつて現れもする。いづれも鹿をもつて神祕なものとする思想にもとづくのであるが、しかも鹿を表面の形として、その奥にある神靈を感じてゐたことが窺へるのである。